

エコロジー都市 江戸

● 100万都市だった江戸

徳川将軍家のおひざ元である江戸は開府当時、人口15万人ほどだったといわれますが、120年後の江戸時代中期には100万人をこえました。当時、ヨーロッパ最大の都市だったフランスのパリが54万人ですから、江戸は世界一の大都市でした。これだけの住民が暮らすための衣・食・住はどうしていたのでしょうか。

実は江戸の町は膨大な人口を養うために、資源を無駄にしない合理的な都市機能を備えていたのです。

● 完備された上水道

江戸の町を開いた徳川家康は1590(天正18)年から、西部の井之頭池を水源とする水道敷設を命じ、これがのちに神田上水と呼ばれました。多摩川上流から引いた玉川上水と合わせると、総延長が150kmの上水道で、技術的に難しい暗渠工事もあり遂げました。

イギリスのロンドンも、江戸より約30年遅れて30kmの上水道ができました。パリ市民は、19世紀末まで生活排水でにごったセーヌ川の水を買って生活していました。

江戸には下水道もありましたが、糞尿は農家が肥料として買い取り、代金は金銭や作物で支払われました。長家には大小便に分けた共用の厠(トイレ)があり、品質ごとに単価が異なりました。栄養価の高い大名屋敷の糞尿は高値で取引され、汲取り権の入札をする専門の間屋までありました。

『南総里見八犬伝』を書いた滝沢馬琴は、その日記に

汲取り権について「1人あたり年間干し大根50本」と記しています。

● 無駄のない資源再生システム

江戸市中のゴミは定期的集められ、船で運ばれて、江戸湾の埋め立てに使われました。また、古い帳簿などの紙クズや、こわれた鍋、包丁、傘、釘、茶碗にいたるまで回収し、修理して再利用されました。

衣料は貴重品なので、何度も仕立て直されました。古着商が日本橋や神田川べりに軒をつらねて繁盛し、その組合には行商人もふくめて1100人も加盟していました。

江戸時代はこのような高度に発達したりサイクルをくむエコロジー社会ができていました。環境面ばかりでなく、物価をみても、飢饉のときや幕末を除いて米価は比較的安定し、そば代も銭湯代も200年間据え置きという安定した社会がつづいたのです。



玉川堤 (歌川広重画)